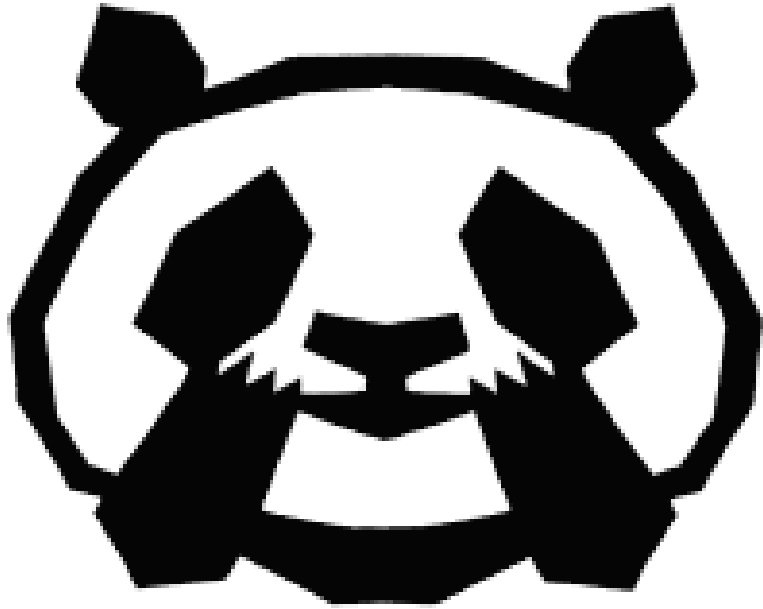


V部



おわりに

- ・ おわりに
- ・ 編集後記



【おわりに】

プログラムを修了した今、思うこと

大学生は自由意志を持っている。その思想や行動は外部からの制限を受けることがなく、いくらでも花開かせることが出来る。なるほど、確かに大学生ほど時間があり所属組織からの圧力を受けない時期はないのかもしれない。私も、今のうちに書を読み、人と出会い、旅に出て見識を広げるとアドバイスを頂いたことがある。しかしながら、実際に学生をしていると、その自由意志はあることに制限されていると痛感する。それは、関係を築ける対象の広さと金銭的な制約である。そういった意味で、このプログラムは典型的な大学生である私にとって大変有意義なものであった。

今回、私個人の力では、到底経験できなかった多くの機会を頂いた。国を創っていく強い意志を持った復旦大学とのディスカッションがそれであり、強い力を秘めた国を支え、更に良くしていこうと努力する IMF や人民銀行、財政省への訪問もまた然りである。そして、日本人として中国で活動している日系企業、JICA の訪問からは、国民性の違いなどを含めた異国で活動することの「難しさ」と「楽しさ」について知ることができた。それらは、確かに私、そしてプログラム参加学生の視野を広げ、新しい価値観を与える経験となった。

末筆ながら最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった方々に感謝致します。特に、5 月に初めて顔を合わせてから毎週のゼミ活動に切磋琢磨し、中国での苦楽を共にした仲間達、そして長い期間に渡り私たちにご指導頂き、準備と実施に奔走して頂いた劉先生には尽くす言葉がありません。皆さんとこの夏に活動できたことを大変嬉しく思います。多謝。

副幹事 飯山聖基

編集後記

上海や北京の高層ビルを思い起こす今、私は国立・一橋大学の一室でこれを書いている。

中央線で40分強、電車で揺られればそこは都心。

20年前には、現在の中国と同じバブルに湧き、熱気に満ちていたという街、新宿がある。

瀬戸内海を望む穏やかな町から3年前に上京した私にとって、憧れの首都東京は、確かに目を見張る都会でありながらもドラマや映画の世界そのままの、少しなじみのある場所だった。

昨今ニュースで取り上げられることの多くなった中国。

その首都北京や発展都市上海も、たびたび新聞やニュースで取り上げられ、日々目にするものではあった。

近代的なタワーの数々とLEDの成す美しい夜景、その傍らに風雅な伝統建築が混在する町。

生活水準の上昇と共に増える高級車、スーツに身を固め颯爽と歩くビジネスマンや、華やかに着飾った人々。

しかし、現地の土を踏むことで、その切り貼りされたイメージからかけ離れた一国の姿を見たように思う。

目まぐるしい発展を遂げる中国には、いまだ「途上国」というレッテルが貼られている。

現実に、貧しく日々を精一杯に生きる多くの人々が、空に伸び行く高層ビルを不安げに見上げて暮らしていた。

また、一見バブルを享受する立場にある人たちも、何らかの不安を抱えて日々を過ごしていることが分かった。

彼の有名な刑事も、「事件は会議室じゃなくて現場で起きている…」といったように、

現地にはニュースや新聞を見るだけではわからない、その地特有の空気がある。

この報告書は、私たち10人が調査を経て学び感じとったことの集大成である。

日本にいただけでは分からない、目耳を通しやっと思える生身の中国を映し出したものだ。

この時私たちが見た中国は、一つ季節を巡り、また新たに様変わりしていることだろう。

それでも、この報告書を手にしてくださった方々に、あの一週間の現地調査を通して私たちが経験した、

忘れがたい興奮や様々な感情が伝わることを願って、報告書を終えたい。

ありがとうございました。

編集委員長 中尾 実貴



HITOTSUBASHI UNIVERSITY